

東洋学園大学 日本語教員養成課程での学び

— 修了生へのインタビュー調査より —

山本 博子・作田 奈苗

要 旨

本論は、本学グローバル・コミュニケーション学部の2018年度日本語教員養成課程修了生へのインタビュー調査を通し、修了生達が日本語教員養成課程で何を学んだのか、就職後にその学びをどのように生かしているのかを明らかにしたものである。その結果、養成課程で身につけた日本語に対する分析能力や教室活動に関わる知識や技能が、日本語教育機関だけでなく児童養護施設等に就職しても生かされていることが確認できた。一方、日本語学校に非常勤教員として就職した修了生からは、給与面等の待遇の厳しさから、養成課程を修了しても、日本語教員としての仕事を続けることが困難な状況をうかがい知ることができた。

以上のことから、日本語教員養成課程担当教員は、日本語教育現場の実情を正確に把握し伝えていく必要があり、なおかつ、日本語に対する分析能力や日本語を教える技能が、日本語教員にならなくても生かされる力であることを学生達に意識させ、養成課程での学びを広い視野で捉えるよう導いていく必要があることがわかった。

I はじめに

東洋学園大学にて日本語教員養成課程が設置されてからおおよそ20年が経つ¹。日本語教員養成課程に登録をした学生達は、本学が定める所定の科目（巻末の表1参照）を履修することにより²、卒業時に日本語教員養成課程修了証が授与され、国内外で日本語を教えることのできる資格を得る。

2000年度から2018年度までの課程修了者の人数は、175名である（巻末の表2参照）。そして、筆者らが確認できる範囲内ではあるが、現在日本語学校の専任職として働いている修了生は4名である³。修了生全体の人数に対して、実際に日本語教員として就職した者はその2%程度ということになる。つまり、日本語教員養成課程を修了したことにより国内外の日本語教育現場で教える資格を得たにもかかわらず、大半の修了生は卒業後に日本語教員という職業を選択していないのである。

この原因はいったいどこにあるのだろうか。当然修了生それぞれの個別的な事情も関係しているが、今までに筆者らが日本語教員養成課程の学生達の就職活動時の様子等を見聞きしたことにより、大きく2つの要因が考えられる。まず1つ目は、日本語教員として就職したいという気持ちを持ちながらも、日本語教員の実情を知り断念せざるを得なかったという理由である。2つ目は、もともと日本語教員として就職することを目的として日本語教員養成課程を履修していたのではなく、言葉について

の興味や別の目的から養成課程で学んでいたという理由である。1つ目については、牲川波都季(2019)にて、有田佳代子が「若い層の日本語教育離れの原因は多くの場合、端的に言って、労働条件・労働環境の悪さ」だとし、「ある場合には奨学金返済が難しいほどの給与水準であること」だと指摘している。2つ目については、義永美央子・嶋津百代・櫻井千穂(2019)にて、大学や専門学校等で日本語教員養成講座を受講したのちに、会社員やアーティストとなった人達が紹介され、日本語教員養成講座での学びが日本語教員以外の仕事に就いた際もなんらかのかたちで生かされていることが示されている。

本学の修了生が1つ目の理由で日本語教員の道へ進まなかったとすれば、彼らは日本語学校のどのような現実に困難を感じたのであろうか。一方、希望が叶い日本語学校に就職した修了生は、日本語学校という職場にどのような印象を持ちながら働いているのだろうか。また、日本語教員になることを目的とせずに養成課程を履修していた修了生は、なぜ他の職業に興味を持ちつつも養成課程で学ぼうと考えたのだろうか。そして、就職後に養成課程で学んだことをなんらかのかたちで生かすことできているのだろうか。これらを明らかにすることにより、本学における日本語教員養成課程の意義を見出し、今後の指導に役立てることができると思われる。

そこで、本論では、2019年3月に本学を卒業した2018年度日本語教員養成課程修了生10名のうち6名⁴に対してインタビュー調査を行うことにより、彼女達⁵が日本語教員養成課程でどのような学びを得たのか、そして、職業選択の際や就職後にその学びが何らかの役に立っているのか、役に立っているとすればそれはどのようなことなのかを明らかにする。昨年度の養成課程修了生は、日本語学校に就職した者や別の教育機関に就職した者、芸能関係の仕事に就いた者など、その進路が比較的多岐に渡るため、養成課程での学びが、それぞれの職業にどのように生かされているのかも示したい。

II 先行研究

分析に入る前に、日本語教員養成課程修了生へのインタビュー調査を行っている先行研究を紹介する。

中川良雄(2015)では、10名の日本語教員養成課程の修了生(2つの大学の修了生を対象にしている。修了年度は1998年度から2013年度に渡る。)にインタビュー調査を行い、日本語教員養成課程で学ぶことによって、「異文化コミュニケーション」「対人コミュニケーション」「外国人とのコミュニケーション」の能力が養われたことがわかったと述べている。さらに、中川良雄(2016a)では、10名の日本語教員養成課程の修了生(2つの大学の修了生を対象にしている。修了年度は1998年度から2013年度に渡る。)にインタビュー調査を行い、入学前・入学後の思いから概念を抽出している。そして、入学後に、日本語教員養成課程で学ぶことに「期待通りで満足、頑張れる」と思う者もいれば、「日本語教員になるのは予想外に難しい」と思ったり、理論的学習や実践的学習のバランスについて葛藤したりする者もいることが明らかにされている。中川良雄(2016b)では、中川良雄(2016a)でのインタビュー調査をもとに、課程を修了することにより、「職場で日本語指導」をする力や、「日本語表現能力」を身につけた修了生がいることを明らかにしている。以上のように、中川の先行研究では、修

了生のコミュニケーション能力や日本語指導力・日本語表現力の変容について取り上げている。本論では、具体的に日本語に対するどのような分析能力が身についたのかなどについても示していきたい。

鈴木寿子（2011）や武田知子（2013）も、日本語教員養成課程で学んだ学生について調査しているが、鈴木は1名の修了生を対象にした考察にとどまり、武田は教育実習を通しての学生の変化について述べている。本論が調査対象としている日本語教員養成課程修了生は教育実習が必修である学年ではないため、日本語教員養成課程における授業で何を学んだのか、どのような変化があったのかを探ることになる。また、先にも述べたように、異なる職業に就いた複数の学生を対象にインタビューを行うため、それぞれの職業と日本語教員養成課程での学びとの関連性についても示していきたいと考えている。

以下、インタビュー調査の概要を示したうえで、調査により明らかになった修了生の実情について述べていく。

Ⅲ インタビュー調査の概要

本章では、インタビューの内容を分析することに先立ち、インタビュー調査協力者である2018年度修了生6名の現在の所属等を示す。さらに、インタビューの方法や質問事項について記す。

次章では、AからFの順番にインタビューの内容を紹介及び分析していきたい。

1. 調査協力者

A	2019年4月より、千葉県内の日本語学校にて専任教員として勤務。
B	2019年4月より、東京都内の日本語学校にて非常勤教員として勤務したが、同年6月に退職。その直後から就職活動をし、2019年7月より通信関連会社に勤務。
C	2019年4月より、東京都内の日本語学校にてパート事務職員として勤務したが、同年6月に退職。2019年8月現在、写真館でアルバイトをしながら一般企業への就職活動を行っている。
D	2019年4月より、東京都内の児童福祉施設にて専任職員として勤務。
E	2019年4月より、東京都内の保育園にてパート職員として勤務。
F	大学在学時より芸能事務所に所属。2019年8月現在もオーディション等に挑戦しながら、女優として活動中。

2. 方法及び質問事項

インタビュー調査は、筆者（山本）の研究室⁶にて、2019年8月10日と24日にそれぞれ3名ずつ、1人につき約1時間行なった。両日とも、山本と作田の2名が聞き手となり、ICレコーダーで録音をした。

インタビューに先立ち、修了生には以下の1～4の質問を記したアンケート用紙⁷をメールで送り、事前に記入し提出してもらった。インタビューは、このアンケートの順番で行い、事前に回答されて

いる内容やその内容に関わることについて、詳しく話してもらおうというかたちにした。

- 1、なぜ大学で日本語教員養成課程を履修しようと思いましたか。
- 2、なぜ現在の職業を選びましたか。
- 3、日本語教員養成課程で学んだどのようなことが、現在のあなたの職業に生かされている（または、関係している）と思いますか。
- 4、日本語教員養成課程で学んだことが、今後のあなたの仕事や生活に生かされることがあると思いますか。それはなぜですか。どちらかを選びその理由を説明してください。
 - ①生かされると思う。（理由）
 - ②特に生かされるとは思わない。（理由）

IV 日本語教員養成課程での学び

本章では、インタビューの内容を紹介しながら、卒業後それぞれの道へ進んだ修了生達が日本語教員養成課程で何を学んだのか、さらには日本語教員養成課程の意義とは何であるのかについて考えていきたい。

まず、希望が叶い日本語学校の専任教員として就職した修了生について、次に、日本語学校で非常勤職員や教員として勤務したものの、2カ月で退職した修了生2名について取り上げたい。最後に、日本語教員とは別の職業を選択した3名について取り上げる。

なお、インタビューにおける修了生達の発言を引用する際は、文のつなぎ方を簡潔にするなど本論筆者が修了生達の発言に一部変更を施すこともあるが、修了生達が伝えたい趣旨に影響を及ぼさないよう配慮している。

1. 日本語学校に専任教員として就職した修了生

Aは、大学入学前から日本語教員になりたいという思いを抱いており、その思い通り新卒で千葉県内にある日本語学校の専任教員として就職した。そして、就職してから半年近く経った2019年8月現在も元気に仕事をしていた。

ここでは、まず、Aがなぜ高校生の時から日本語教員になりたいと思ったのか、そして、実際に日本語教員になった今、日本語教員養成課程でのどのような学びが現場での仕事に役立っていると考えているのかを記す。さらに、憧れを抱いて就職した日本語学校に対して現在どのような印象を持っているのかを示していきたい。

Aは、日本語教員を職業としたいと思ったきっかけについて以下のように述べた。

高校3年生の時から日本語教員を目指していた。私の高校はビジネスコミュニケーション科があり、英語と簿記の勉強とかビジネスの勉強をしていて、ALT (Assistant Language Teacher) がたくさんいらっしゃって。授業を受けていて、この先生の立場で日本語を教えられたらいいなと思って、日本語教員なりたと思った。

つまり、Aは、ALTと接することにより、自分の母語を他の言語を母語とする人達に教える仕事があることを知り、その魅力を感じ、自分の母語である日本語を教える教員になりたいと考えたのである。

続いて、「日本語教員養成課程で学んだどのようなことが、現在のあなたの職業に活かされている（または、関係している）と思いますか。」という質問については、知識面での学びと実践面での学びが両方とも役に立っていると述べた。知識面では、漢字の部首の成り立ちについて学んだことを、漢字学習に苦勞しているベトナム人等に伝えて、漢字に対する理解を促進させたことなどを挙げた。実践面では、教案の書き方を学んだことや教材研究活動で目次を見てどのようなシラバスの教科書かがわかるようになったことなどが、現在の授業作りに役立っていると述べた。

以上のように、Aは、基本的には現在の職場に対して不安や不満を感じることはないようであった。しかし、Aは、時折、人間関係が難しいと感じたり、ベテランの先生の前では緊張して萎縮してしまったりすることがあると言っていた。確かに、日本語学校は、チームティーチングであるため、世代や経歴や職場での立場の異なる教員同士が、一緒に日々の授業を作り上げていかなければならない。そのような教員と教員の関係の築き方の難しさなどについては、養成課程の授業内では学ぶことができず、実際に働いてみてはじめて実感することだと言えよう。

2. 日本語学校での仕事に就いたものの2か月で退職した修了生

ここでは、短い期間ながら希望する日本語学校で働いた修了生2名について取り上げたい。大学に入学して以降日本語教員になりたいという思いを抱き課程での学びを積み重ねた彼女達が、なぜAとは異なり、日本語教育現場にとどまることをせず別の職業に進もうと考えたのか、その原因を明らかにしていきたい。

2-1. 非常勤教員として2か月間勤務した修了生

Bは、1、2年次の履修ガイダンスで配布された日本語教員養成課程の履修科目一覧を見て、大学を卒業するまでにこのような資格を取っておきたいと思い、日本語教員に興味を持ち始めたそうである。さらに、2年次前期に「言語学入門」を履修し、その年の夏休みに同授業の担当教員（依田悠介准教授⁸）が引率するタイでの学外研修に参加し、国立チュラロンコーン大学で日本語を学ぶ学生達の日本語の上手さを目の当たりにしたり、バンコク国際交流基金を訪問し日本語教育の現状を聞いたりしたことにより、日本語教員になることを明確に将来の目標とすることにした。また、英語が好きで海外で働きたいという夢があるため、日本語教員になれば様々な国に行く機会も増えると思ったそうである。

その思いを抱き続けたBは、大学4年次の後半に日本語学校への就職活動を行い、2019年4月より東京都内の日本語学校にて週に2日の非常勤教員として勤務したが、わずか2か月後に退職した。退職した理由についてBは以下のように述べた。

大きなきっかけは、やっぱりお給料。仕事がいへんなわりに少ない。(日本語学校と別のアルバイトを) かけもちしていたので、体力的にもこれが続けていたらもたないと思った。安定がほしいとも思った。9月か10月くらいから奨学金の返済が始まるので。(週2日の非常勤であったので) 1か月のお給料は4、5万円程度。ゴールデンウィークなどがあると、授業がなくなり、月によっては収入が減ってしまう。

(専任の先生が10人もいない学校で) 専任になれそうだという見通しも立たなかった。

非常勤教員ということもあり、給与の問題が最も大きかったようである。また、奨学金返済の開始や専任への見通しも立たないことなど、現在の状況が今後よくなるという希望が持ちにくいという理由もあったことがわかった。

また、2カ月という限られた期間だったこともあり、授業運営にも楽しさややりがいを持てるような余裕は生まれず、「初級クラスを担当したかったが、中上級クラスを担当させられた。教材の語彙の説明や読解の内容が自分にとって難しかった。」「自分が新人の教員とわかるからか、授業中携帯を見続けたり、おしゃべりをし続けたりする学習者がいることがつらかった。」などと苦勞を感じることのほうが多かったようである。

以上のように主に経済的な不安から日本語学校を退職したBは、同年7月より、都内にある通信関連会社に就職した。この会社の業務の半分が英語を使って行われることから、得意な英語力をさらに伸ばせると考え、就職することを決めたそうである。また、この会社には、社内日本語教員として、外国人社員に日本語を教えてほしいとも言われているとのことであった。

Bは、この通信関連会社において、以下のように、日本語教員養成課程で学んだことが生かされていると述べた。

現在は、お客様から回線のトラブルでの修理依頼を受けたり、商品についての質問などを受け付けたりする仕事をしている。ネットワークの分野にはたくさんの専門用語があり、一般の方にはわからないものも少なくない。そういった専門的な用語やしくみがあるなかで、学習者に日本語をいかにわかりやすく教えるかを学び、うまく伝わらなかつたら別の言葉で言い換えたり絵を描いたり伝わる方法を考えたことが生かされていると思う。正しい日本語を学んだことも生かされている。

さらに、「日本語学校で授業内容について教員間で引き継ぎをし、情報を伝達した経験が、社員間での『ホウレンソウ』(報告・連絡・相談)が求められるという現在の会社での業務遂行に生かされている。」とも述べた。

以上のように、Bは、日本語教員養成課程での学びや日本語学校での経験を無駄にすることなく自らの力にし、自分に適した仕事を見つけ、さらに成長しようと努めていた。

2-2. 非常勤職員として2か月間勤務した修了生

Cは、もともと大学在学中に将来的に生かすことのできる資格やスキルを得たいと考えていたそうである。また、中国語の学習に夢中になり、その過程で中国人の先生が自分の母語である中国語を教える姿を見て、自分も外国の人達に自分の母語である日本語を教えてみたいと思うようになったと述べた。さらに、初めて中国に短期留学に行った際に先輩が中国の大学生に日本語を教えている姿を見たり、2度目に中国に短期留学に行った際は自分も日本語を教える経験を得たりしたことにより、日本語教員になりたいという目標をより強く持つようになったそうである。

大学在学中に何か資格を取りたいと思っていた点や、海外での日本語学習者との交流を通して日本語教員への夢を確かなものにした点が、Bと共通している。

Cは、大学時代の目標をほぼ叶えるかたちで、2019年4月より、中国人留学生が多い東京都内の日本語学校に週に3日の教務事務非常勤職員として就職した。Cは、2018年秋から同校でアルバイト職員として働いており、4月の時点で、同校との信頼関係もある程度は築けていたと考えられる。同校では、同年7月より研修を受けた後に10月より非常勤教員となり、さらに半年後には専任教員になるという道筋もある程度は見えていたようである。そのような状況のなか、Bと同じく2か月で退職することを決めた理由とは何だったのだろうか。そこには、会社勤めをしたことがないという自分自身の経験不足への焦りと、会社勤めの経験を身につけたいという欲求があったようである。

先生方に社会人経験をした人が多くて、私も人生経験とか社会人経験をしてもっと自分自身をスキルアップさせたいなと思って。社会に出てからのほうが、もっと教えられることとかが増えるのではないかなと思って。自分が勤めた日本語学校が会社のように、会社で働いた経験がありビジネスマナーを身につけたうえで先生をやっている方が多かった。一度週5で働く社会人になりたいと思った。

このように述べながらも、Cは「決して日本語学校や日本語教員がいやになったわけではなく、戻れるのだったら戻りたい。」「改めて自分に余裕ができた時に、講座などに通って勉強し直して、日本語教員になりたいなと思って。」とも述べ、より良い日本語教員になるために、一度別の経験をしたいという思いが強くなったのだということがわかった。この点については、Bとは異なる理由での退職であるが、やはりBと同様に、収入の面や保険に入れないなど福利厚生での不安があったとも述べていた。

最後に、「日本語教員養成課程で学んだことが、今後のあなたの仕事や生活に生かされることがあると思いますか。」という質問に対しては、日本語教員養成課程の授業で発表の場が多くあったことから、「人前で何かを披露することや、人前で話すことがストレスではなくなった。」と述べ、日本人に対しても、外国人に対しても、笑顔を忘れず、言葉を選んで心地よいコミュニケーションができるように心掛けられるようになり、このコミュニケーション力を一般企業に就職した際も生かしていきたいと述べた。

以上、B・Cが、非常勤教員・非常勤職員として仕事をしていくなかで、自分の現状や将来に何らかの不安や焦燥感を抱き、別の道に転換することを考えざるを得なくなったことがわかった。この2人の状況から、日本語学校が、もともと給与水準が高くないなか、専任教員よりも非常勤教員が多い体制である⁹ことが、大学卒業後の若者を日本語教員という仕事に定着させることを難しくしている現状を見て取ることができた。

しかし、その一方で、Bは、日本語教員養成課程で学んだことや日本語学校での経験を、現在の仕事に生かしており、Cも、今後の仕事に生かしていきたいと述べていた。このことから、日本語教育に関わる学びや経験が、社会で人とつながりながら仕事をし、生きていくためにも意味のあるものだというを確認することができた。

3. 日本語教育とは別の分野の職業に就いている修了生

ここでは、児童福祉施設・保育園で働いている修了生、及び芸能活動をしている修了生について取り上げ、日本語教員養成課程での学びと別の職業との関係性について紹介していきたい。

3-1. 児童福祉施設に勤務している修了生

Dは、2019年4月より、東京都内の児童福祉施設にて専任職員として勤務している。その施設は、小学生から高校生までの自閉症やダウン症等のなんらかの障がいのある児童生徒が放課後に通うために設けられている。

Dが日本語教員養成課程で学ぼうとしたきっかけは、大学2年の夏休みにBも参加したタイへの学外研修に行き、国立チュラロンコン大学で日本語を学ぶ学生達と交流することにより、教えることの楽しさ、伝えたいことが伝わった時の嬉しさを経験したことである。それ以前は、日本語教員という仕事があることすら知らなかったという。

しかし、その一方で、大学1年次から、現在の就職先である児童福祉施設でアルバイトをしており、障がい児達の心の純粋さに魅力を感じていた。そして、進路を決める段階において、施設に通う子ども達と離れたくない、この子達の成長をまだ見ていたいという思いがあったため、そのままアルバイト先である施設に就職することを決めた。

「日本語教員養成課程で学んだどのようなことが、現在のあなたの職業に生かされている（または、関係している）と思いますか。」という質問について、養成課程で得た日本語の音声や文法の知識が、児童の言葉の特徴に気づく際に影響していると述べた。

(障がい児の言葉を聞いていて) この子は、拍は合っているけれど子音が出ない(「リ(ri)ンゴ」が「イ(i)ンゴ」になる。「コ(ko)ウエン」が「オ(o)ウエン」になる。)などと分析ができる。この子は、名詞・動詞は言えるけれど、助詞をつけることができていないなどということがわかる。

さらに、インタビューを行っている際に、児童に言葉の練習をさせる時と日本語初級学習者に日本

語を教える時の内容や使用する教材等に共通点があることに、D自身が気づいていった。

個別にその子にあった勉強をすることもあって……。単語を並び替えたり、文章を作らせたりするドリルを行う。名詞や動詞や形容詞の勉強もするし、絵カードも使う。私はあまり言葉を使い過ぎず、ただ絵カードを見せるだけにする。日本語教育と同じだ！

また、今後「児童生徒の個別支援計画を立てる立場になった時に、発話について細かく分析できることは役に立つと思う。」とも述べていた。

日本語教育と障がいを持つ子ども達への教育は、教育や支援に関わる分野である点で共通していることは確かであるが、Dの話聞くことにより、言葉の指導をする際に求められる観点や求められる指導方法に非常に似た要素があることがわかった。

3-2. 保育園に勤務している修了生

Eは、2019年4月より、東京都内の保育園にてパート職員として勤務している。

Eが日本語教員養成課程で学ぼうとした理由は大きく2つあると答えてくれた。1つ目は、海軍基地のある横須賀で育ち、街でも多くの外国人とすれ違うような環境にいたため、この課程で学んだら、将来横須賀で仕事をする時に役に立つのではないかと思ったという理由である。2つ目は、英語を学んでいくなかで、母語である日本語について知らないことがあることに気づき、自分の母語を知りたいと思ったという理由である。

Eは、日本語教員養成課程で学びながらも、同時に本学の児童英語教育課程でも学んでいた。もともと子どもと英語が好きであったEは、児童英語教育ゼミの活動として保育園で英語を教え、また保育園でアルバイトもし、実際に子どもと触れ合うなかで保育園に勤めたいと思ったと述べている。

日本語教員に関わる勉強をしながら、もう一つ自分の軸となる活動を見出し、そちらを職業としようと決めた過程はDと共通する。

しかし、Eは、英語の授業も担当するという予定で同保育園に就職したものの、保育園の事情もあり、2019年8月現在においては、まだ保育園で実際に英語の授業を担当したことはないということであった。そのため、日本語教員養成課程で学んだことが仕事に生かされているかという質問については、以下のように答えた。

まだ生かせていないが、今後、本格的に子どもたちに英語を教えるようになったら、生かせることがあるのではないと思う。ペープサート・絵カード・文字カードなどは、児童英語と日本語教育に共通している教具であるし。また、日本語教員養成課程で、授業の組み立て方や学習者に興味を持ってもらう授業活動を考えたことも、生かせる部分だと思う。

日本語教育も児童英語教育も、学習者の母語ではない言葉を教えるという点で共通している。その

ため、日本語教員養成課程での学びが、児童に英語を教えるという仕事に直接役に立つであろうことが推測できる。

3-3. 芸能活動をしている修了生

最後に、大学在学時より芸能事務所に所属し、2019年8月現在もオーディション等に挑戦しながら芸能活動を続けている修了生Fについて紹介する。

今まで見てきた修了生の卒業後の職業のなかで、場合によっては最も日本語教員と関わりのない職業に見えるかもしれない。しかし、Fは、小学生の頃からやりたいと思っていた芸能の仕事に、日本語教員養成課程での学びが役に立つであろうと思い、養成課程の授業を履修していたと述べた。そして、日本語教員養成課程で学んだことが現在の仕事に活かされているかという質問について、「生かされていると思う。お芝居をするうえで基礎となる学び（発声や発音方法・日本語の正しい使い方について）が、日本語教員養成課程にはたくさんつまっていた。」と明確に返答した。具体的には、

音声の授業で、発声の際の舌の位置なんて今まで考えたことがなかったので、すごくおもしろかった。舌の動き・使い方を知って、口の中のどのような動きがどのような音につながるのかわ知っていることは、声の出し方を工夫したい際に絶対に生きて思った。「たのしかった」や「おいしかった」と台詞を言う時の表現の幅を広げたい時に、舌の動きや口全体の動きの構造がわかっていたら、自分の引き出しが増える。口の仕組みまでは、お芝居の発声の練習では教わらない。日本語に特化した授業だから学べた。

と、音声についての学びがいかに現在の活動に影響を与えているかについて語った。語彙について学んだ授業についても、以下のように述べた。

「たのしい」「おもしろい」「うれしい」など、似ているようで違う言葉が日本語にたくさんあることを知った。一つ一つの意味の違いがわかって使い分けられたらいいなと思った。台詞を言う時に、脚本家が同じような意味の言葉もあるのに、なぜこの言葉を選んだのかわかれば、もっとよく理解できるし、表現方法も工夫することができるはずだと。

似ているように見える言葉のそれぞれの固有の意味や用法を学んだことが、台本に書かれている言葉を分析し、どのように表現していくかに役立っているのである。

自分が発する言葉と他者の発する言葉という違いがあるものの、日本語教員養成課程で日本語の音声・文法・語彙等についての知識を得たことにより、言葉を分析する力がつき、現在の仕事に生かすことができているという点においては、児童福祉施設で働くDと共通しているとも言える。

V おわりに

以上、本論では、2019年3月に本学を卒業した2018年度日本語教員養成課程修了生のうち6名に対してインタビューを行うことにより、彼女達が日本語教員養成課程でどのような学びを得たのか、その学びが就職後の彼女達の仕事等に何らかの影響を与えているのかを探り明らかにした。

日本語学校に専任教員として就職した修了生Aは、本学の養成課程で身につけた知識や教授法を活用し日々の仕事に取り組んでいた。今後、教員としての実績を積んでいく過程で、養成課程で得た以上の知識が必要になることや、授業運営における難題に向き合わなければいけないこともあるだろう。その際も、日本語教員養成課程での授業をはじめ、大学時代に培った課題を解決していく力を生かし、乗り越えていってほしい。

一方、日本語学校に非常勤教員・非常勤職員として就職した修了生B・Cからは、数か月でやめ、別の仕事を探さざるを得なくなった実情や心の変化を聞くことができた。彼女達の話からは、日本語学校の、専任教員を多くは雇わないことや、非常勤教員が専任教員になる見通しも立ちづらく、立っていたとしても一定の時間を要するという厳しい現状が見えてきた。日本語教員養成課程を担当する教員は、日本語学校への就職を希望する学生に対しては、勤務形態や給与について理解させ、続けていくことができそうなのかということを検討させる必要があることが確認できた。

さらに、他の職業への関心を持ちながらも日本語教員養成課程で学んだ修了生達D・E・Fは、日本語を教えることや母語である日本語そのものに興味を持ち、養成課程での学びを積み上げていたことがわかった。そして、養成課程で身につけた日本語の音声や文法・語彙についての分析能力が、障がい児への言葉の援助、女優という表現者としての活動という異なる分野において生かされていることも確認できた。

以上のことから、今後も、日本語教員養成課程の授業を受ける学生達には、自分の母語である日本語について学び分析する力を身につけていくことが、日本語教員にならなくても生かされる力であることを意識させ、養成課程での学びを広い視野で捉えるよう導いていきたい。

[付記]

本研究は、2019年度東洋学園大学特別研究（研究課題：母語能力育成プログラムと日本語教員育成プログラムの構築）の成果の一部である。

【表1】本表は、2015年度入学生用『学生便覧』の「日本語教員養成課程履修要項」に記載されている科目表及び注記を忠実に転記したものである。

		科目名	区分	年次	単位	要件	
必修		日本語教育法入門	展	2	2	18 単位	
		日本語研究 1・2	展	3	2+2		
		日本語研究 3・4	展	3	2+2		
		日本語教育法 1・2	展	3	2+2		
		日本語教育法特講 1・2	特	4	2+2		
選択	I 群	フランス語 I A	表	1	1	12 単位以上	
		フランス語 I B	表	1	1		
		中国語 I A	表	1	1		
		中国語 I B	表	1	1		
		ハングル I A	表	1	1		
		ハングル I B	表	1	1		
		心の理解	養	1	2		
		世界の言語政策	英・礎	2	2		
		教育心理学	英・展	3	2		
		教育方法論 I	英・幹	3	2		
		言語学入門 (意味と形式)	英・幹	2	2		
		言語学入門 (意味の起源)	英・幹	2	2		
		教育言語学 1・2	英・幹	3	2+2		
	日英語対照研究 (音と語のしくみ)	展	3	2			
	日英語対照研究 (文法と意味)	展	3	2			
	日本語研究特講 1・2	特	4	2+2			
	II 群	情報処理基礎 A・B	表	1	1+1		2 単位以上
		情報処理応用 A	表	2	1		
		情報処理応用 B	表	2	1		
	III 群	ことばとコミュニケーション	礎	1	2		4 単位以上
国際社会とコミュニケーション		礎	1	2			
比較文化論入門		展	3	2			
比較文化論		展	3	2			
	比較文化論特講	特	4	2			
IV 群	日本国憲法 (基本的人権)	養	2	2	2 単位以上		
	日本文学	展	2	2			
	都市の伝統教養	グ・幹	2	2			
	日本の伝統文化	養	3	2			
	現代の日本文化	養	3	2			
	現代日本研究 1	展	3	2			
	現代日本研究 2	展	3	2			

※この表の必修とは、日本語教員養成課程修了の為に必修であり、卒業に必要なという意味ではない。
 ※科目名欄に1・2・3・4およびA・Bと併記されている科目は、一方だけでなく両方の単位を合わせて修得しなければならない。

		区 分	
表	→ 表現伝達科目	グ・幹	→ グローバル・コミュニケーション 学科専門基幹科目
養	→ 教養基礎科目	英・幹	→ 英語コミュニケーション学科専門 基幹科目
礎	→ グローバル・コミュニケーション 学部専門基礎科目	展	→ グローバル・コミュニケーション 学部専門展開科目
英・礎	→ 英語コミュニケーション学科専門 基礎科目	英・展	→ 英語コミュニケーション学科専門 展開科目
幹	→ グローバル・コミュニケーション 学部専門基幹科目	特	→ グローバル・コミュニケーション 学部専門特別講義科目

【表2】年度ごとの日本語教員養成課程修了生数（教務課川井涼子氏より提供）

年度	3月修了	9月修了	備考
2000	8	—	—
2001	31	—	—
2002	19	—	—
2003	15	—	—
2004	8	—	—
2005	14	—	—
2006	9	—	—
2007	5	—	—
2008	8	—	—
2009	9	—	—
2010	3	1	9月修了者は科目等履修生
2011	4	—	—
2012	11	—	—
2013	4	—	—
2014	5	—	—
2015	1	1	9月修了者は科目等履修生
2016	5	—	科目等履修生1名を含む
2017	4	—	—
2018	10	—	—
合計	173名	2名	—

【主要参考文献】

- 鈴木寿子（2011）「日本語教師にならない人」にとっても有益な日本語教師養成はどうあるべきか 開放的教師養成のための一考察（『リテラシーズ』第8号）
- 牲川波都季編著（2019）『日本語教育はどこへ向かうのか 移民時代の政策を動かすために』くろしお出版
- 武田知子（2013）「恵泉女学園大学日本語教員養成課程における学生の学び」（恵泉女学園大学『紀要』第25号）
- 中川良雄（2015）「日本語教員養成課程修了生の学び；コミュニケーション-M-GTAによる分析」（京都外国語大学・京都外国語短期大学『研究論叢』第85号）
- 中川良雄（2016a）「日本語教員養成課程修了生の学び—受容と変容(1)—」（京都外国語大学・京都外国語短期大学『研究論叢』第87号）
- 中川良雄（2016b）「日本語教員養成課程修了生の学び—受容と変容(2)—」（京都外国語大学・京都外国語短期大学『研究論叢』第88号）
- 義永美央子・嶋津百代・櫻井千穂編著（2019）『ことばで社会をつなぐ仕事日本語教育者のキャリア・ガイド』凡人社

- 1 筆者である山本は、2005年度より非常勤講師として、2015年度より専任講師として本学に勤めている。作田は、2006年度より非常勤講師として本学に勤めている。したがって、2人とも、本学における日本語教員養成課程設立には携わっていない。
- 2 所定の科目は、学部の科目設定の改編等に合わせて幾度か変更が行われている。本論でインタビュー調査の対象としている2015年度の入学生は、表1で定められている必修科目及び選択必修科目を履修し、合計単位数38単位を取得することにより、課程を修了することができた。2017年度以降の入学生は、必修科目に「日本語教育実習」（1単位）が加わった。また、グローバル・コミュニケーション学部のカリキュラム変更等に伴い、必修科目及び選択必修科目にいくつかの変更が生じている。しかし、必修科目

- に実践的な教育法を学ぶ授業と文法や音声等知識を定着させる授業を据え、選択必修科目に言語学や国際社会・日本社会についての知識を養う授業を据える等、基本的な到達目標は変わっていない。
- 3 非常勤教員やボランティアとして等、何らかのかたちで日本語教員に関わっている修了生もいると考えられるが、ここでは筆者らが確認できている、現在専任職として日本語教育に携わっている4名それぞれの卒業（課程修了）年度及び卒業後の経歴と勤務校の概要を示す。
 - ①2011年度卒業生（男性）：卒業後に千葉県内の私立大学の大学院で言語学を学んだ後、2015年4月より千葉県内の日本語学校の専任教員として勤めている。
 - ②2012年度卒業生（男性）：卒業後に英語の教育機関に勤めたが数か月で退職した。その後、2013年7月より2019年6月まで都内の日本語学校で専任教員として勤める。2019年7月よりインドのデリーに渡り、現地の日本語学校の校長に就任し、学校運営や授業管理に従事している。
 - ③2017年度卒業生（女性）：卒業前よりアルバイトとして携わっていた埼玉県内の日本語学校に、卒業した年（2018年）の4月から6月まで非常勤教員として勤める。同年7月より、専任教員として採用される。
 - ④2018年度卒業生（女性）：卒業した年（2019年）の4月より千葉県内の日本語学校で専任教員として勤めている。（本論の調査対象学生Aと同一人物である。）
 - 4 インタビュー調査の対象とすることができなかった4名について、なぜインタビューをすることができなかったのかを以下に示す。
 - ①入学年度が他の学生よりも1年早く、大学に5年在学しており、他の学生と在学時の学習環境や就職に対する考え方が異なる可能性があるため。
 - ②2019年3月20日の本学卒業式及び日本語教員養成課程修了書授与式に出席せず、連絡が取りにくい状況にあるため。
 - ③2019年4月より西日本で仕事をしており、都内にある本学でのインタビュー調査に応じるのが困難であるため。
 - ④都内に勤めているが、多忙でありインタビュー調査のために時間を調整することが困難であるため。
 - 5 2018年度の修了生は、すべて女性である。
 - 6 東洋学園大学（東京都文京区本郷1-26-3）内
 - 7 本アンケートの質問内容は、中川良雄（2015）が日本語教員養成課程修了生に行なったインタビューの項目を参考にした。
 - 8 職位は本論執筆時のものである。
 - 9 一般財団法人日本語教育振興協会による「平成30年度日本語教育機関実態調査結果報告」には、専任教員と非常勤教員の内訳は、専任教員が29.7%・非常勤教員が70.3%であると示されている。